



東北復興 MHSW にゆうす

新型コロナウイルスへの対応に追われる中、全国各地で豪雨災害が頻発しております。各地にお住いの皆さま、および構成員の皆さまにおかれましては、生活の立て直しや様々な支援に奔走していらっしゃる日々ではないでしょうか。皆さまの働きの上に様々な配慮がありますように、心から願っております。前回に引き続き、3月20日に開催された東日本大震災復興支縁オンライン交流会の登壇者、宮城県支部長の小野正生様に、あらためて想いを語っていただきました。（東日本大震災復興支援委員会一同）

東日本大震災復興支縁オンライン交流会に参加して

宮城県支部 支部長 小野正生

■はじめに

東日本大震災発生から10年が経過しました。改めて犠牲となられた方々のご冥福をお祈りするとともに、御遺族の皆さまにお悔やみを申しあげます。また、震災発生直後から、被災地に全国の皆さまから数え切れない励ましや支援をいただきましたこと、中には、被災地に駆けつけて直接支援をいただきましたこと、改めて御礼申しあげます。



■被災者の10年とは

10年経ったのだから、「そろそろ節目か」と考える人もいるかもしれませんが、「節目はない、区切りがない」と考える人もいるかもしれません。また、自分には「死ぬまで節目は来ないだろう」という人もいるかもしれません。被災者には、それぞれの歩みがあるのだと考えます。うがった見方をすれば、区切りをつけたいのは誰なのだろうと考えることもあります。宮城県だけでも、御遺体が見つからず行方不明の方々が、2021(令和3)年4月1日公表で、1,216名いらっしゃいます。死を認めることはできない。曖昧な喪失状態から抜け出せないという方々が、まだまだいらっしゃいます。節目などにこだわらずにまだまだ時間は掛かる、掛けてもいいのではないかと思います。

■被災者として、支援者として

2011(平成23)年3月11日午後2時46分、私は、宮城県白石市で面接を行っていました。宮城県白石市は福島県と山形県との県境に位置する内陸にありましたので、私自身は直接津波被害を受けることはありませんでしたが、沿岸部に住む親戚たちは避難先である避難所に津波が押し寄せ命を落としたり、自宅に押し寄せる津波から逃げるため家用車に乗り農道を走りましたが津波に飲み込まれ亡くなるなどしていました。あの時は、身内の安否が判明するたびに安堵と涙、沈黙を繰り返し、絶望や落胆よりも、強い怒り、憤り、不条理を感じて生きていました。それでも生き残ってくれた家族や親族がいたからこそ、私は何とか踏ん張れたのだと考えています。家庭と職業の両立、被災地に入っただけの支援は私にとっても身を削るものでした。自分自身の不甲斐なさを痛感するとともに、何より、オーバーワークになっていたことは反省すべき点でした。

■日本文化の功罪

日本人は、他者を思いやる自己犠牲の精神であり、儀礼や思いやり、助け合いなど、譲り合いながら、一列に並んで配給を受ける姿は、海外メディアが称賛した光景です。私は、絆という言葉が苦手です。誤解のないようにしたいのですが、強固な絆は、暗黙のルールや了解、規則を強めてしまい、馴染めない者を孤立させ追い出してしまうがちです。被災地が都市部であれば複数のグループが出来て所属するところが複数となり自由度が出ますが、過疎地などはそうはいかないところがあります。

■震災と地域精神保健

日本の精神保健は、一般的には問題が生じたことに気づいた人が、相談や治療に来るのを待つスタイルです。今回の震災で、宮城県はこころのケアセンターを中心にアウトリーチを積極的に行いましたが、人員の継続的確保など予算配分もあって、アウトリーチが特別なことで終わりはしないかと心配しています。

■ソーシャルワーカーとして危機対応能力を高めるためには

この震災から改めて気付かされたことは、困難や脅威に直面している状況に対して「上手く対応できる能力」を備えるためには、どんな状況でも対応できるような人間関係を構築していることです。「いま忙しいから」ではなく、「どうしたの？」と平素から声を掛け合える人間関係であることが重要で、互いに理解できる関係性があるかどうか大切です。

地域社会を管理する役所や組織が崩壊した時に、通常機能を取り戻すまでのつなぎ役を担い臨機応変に対応し、各種連携機関を繋ぐことが出来るのは、地域社会を知り尽くしているソーシャルワーカーではないかと考えます。そのような人材を複数人揃えることが出来たら、これこそが地域における重要な危機対応能力の一つだと考えます。

■おわりに

私が、皆さまにお伝え出来ることがあるとするならば、災害には特徴があり、歴史性があり、残念ながら繰り返し発生するという事です。私自身も小学生の時に祖母から「仙台バイパス(奥州街道)の東側には家を建ててはいけません。津波が来るからな」と言われていました。人は、自然をコントロールできると過信し、慢心していたのだと思います。私自身もそうでした。伝承を真摯に受け止め、地域社会の歴史を熟知し、災害の教訓や体験を生かすことができれば、確実に被害を少なくすることができたと考えます。

これまで、東日本大震災復興支縁ツアー、東日本大震災復興支縁オンライン交流会に参加した皆さま、また被災地を支援してくださいました皆さま方も本当にありがとうございました。これからも被災地を見守ってくださいますよう、お願い申し上げます。

☆物販のご報告とご案内☆

被災地障害者作業所等製品販売事業

@北海道大会 ～第56回全国大会・第20回学術集会～

2021年9月9日～11日オンライン開催された北海道大会ウェブサイトにて、東日本大震災被災地事業所等の製品を購入できる各事業所のウェブサイトをご紹介します♪ コロナ禍のオンライン開催ということもあり、恒例の対面販売は叶いませんでしたが、この機会に是非被災地の障害福祉サービス事業所の今を知っていただければ嬉しいです。応援よろしく願いいたします！

引き続き下記ページから閲覧することができます。是非ご覧になってみてください！

[第56回全国大会・第20回学術集会ウェブサイト]

☞ <https://www.jamhsw.or.jp/taikai/2021/>

[東日本大震災復興支援・被災地障害者作業所等製品販売事業ページ]

☞ https://www.jamhsw.or.jp/taikai/2021/recovery_support.html



◇オンライン交流会企画中です◇

このコロナ禍ですので、残念ながら今年度も現地を訪れる復興支“縁”ツアーは実施せず、オンライン交流会として企画したいと考えています。

前年度、初の試みだったオンライン交流会に参加いただいた方々からは「震災から10年経ってもなお関心を持って参加する仲間がいたことが大きな収穫」「各参加者が想像力を働かせながら被災地の現状に想いを馳せる時間を持てたことに意義深さがあった」「話す・聴くという対話の積み重ねをこれからも大切に」などのご意見もいただいていた。ソールディスタンスもすっかり定着しましたが、心の距離は離れ過ぎず、程良くありたい気持ちで鋭意取り組んで参ります。詳細は、また改めて…。

編集後記

3.11を体験していると、これから何かが起きるかもしれないという漠然とした不安に今でも時々襲われることがあります。天気図を見ている、コロナの感染者数を見ていると同じです。その不安に煽られて、周囲を不安に巻き込むようなことがないように、自制することも度々あります。

小野支部長のお話から、また当時を振り返る機会をいただいたように思います。教訓を学び、活かし、そして伝え続ける活動を、引き続きしていけたらと思います。(伏見)

【ご意見・ご感想をお寄せください】

本紙では被災した各地の仲間へのメッセージ及び被災地からの情報発信など、相互交流ができる紙面づくりを目指しております。全国どなたからのメッセージでも構いません。本紙へのご意見・ご感想も大歓迎です。それぞれのお立場からの声をお聞かせください。お寄せいただいたメッセージは、本紙面や本協会ウェブサイトにてご紹介させていただきます(原則として投稿者氏名以外の個人情報は掲載いたしません)。投稿方法はFAXもしくはE-mail: office@jamhsw.or.jpにてお願いいたします。

★題名に「MHSWにゆうすについて」とご記入をお願いいたします。★

第54号 2021年9月15日発行

編集：公益社団法人日本精神保健福祉士協会 東日本大震災復興支援委員会

発行：公益社団法人日本精神保健福祉士協会

〒160-0015 東京都新宿区大京町23-3 四谷オーキッドビル7F TEL. 03-5366-3152 FAX. 03-5366-2993

★URL: <https://www.jamhsw.or.jp/>

★東日本大震災復興支援サイト <https://www.jamhsw.or.jp/ugoki/f-jyoho.html>

